

名物先生登場!



こいぬまのりあき

肥沼 則明 教諭

筑波大学附属中学校 主幹教諭

1961年、埼玉県生まれ。埼玉大学教育学部卒業後、埼玉県立毛呂山高等学校、埼玉大学教育学部附属中学校勤務を経て、平成7年度より現職。担任した学年を5回卒業させ、現在は研究部長。他に、埼玉大学教育学部「英語科指導法」講師、中学校教科書『NEW HORIZON』（東京書籍）及び雑誌「指導と評価」（図書文化）の編集委員を務めている。

本学には11の附属学校があります。それぞれの分野でわが国の教育をリードしており、全国でも有名な先生たちが大勢います。各学校で活躍する名物先生を紹介いたします。

「Hello, Mr. Koinuma!」「Hello, everyone!」元気な挨拶で英語の授業が始まりました。日付や天気などのやりとりがリズムカルに続きます。これは全校共通のルーティン。4人の英語科教員が同じ教材を使い、授業の進捗も合わせています。担当の先生が変わったりクラス替えがあっても、スムーズに学びを継続できる仕組みです。

挨拶の後、「Reading Show」の結果が発表されました。これはクラス単位で全学年が行う英語の音読テストです。音読とは、単なる読み上げではありません。

ん。題材を自分で選び、登場人物ごとに声色を変えたり、演技も加えたりと、ちょっとした演劇パフォーマンス大会です。発音リズム、発表態度などを生徒同士でも評価し、優秀発表者の投票が行われます。前回よりも上達した部分、つまり、頑張ったことも評価の対象になるので、下位の生徒もモチベーションが上がります。楽しませるための演出はもちろん、他の人の発表を聞くというトレーニングにもなります。

さて、今日の本題は「Who is ~?」の使い方の復習です。見覚えのある人物のシ

みんなで答えた後は、列ごとに一人ずつ発音を確認します。このようにして授業中に全員が発音する機会を作っています。黒板上には次第に「サザエさん」の家系図ができあがっていきます。教科書にも似たような教材はありますが、より親しみのある図柄の方が、生徒の注目を惹くのは明らかです。



発音と同時に、thisとthatとitの使い分けなど、細かな文法にも注意を払います。些細なことのように思えますが、大切なポイントです。生徒たちも、きちんと学びたいという意識が高いので、曖昧な指導は禁物。myとyourのコンセプトを徹底的に学習したり、挨拶の練習に時間をかけたり、普通なら簡単に済ませてしまいそうな部分に、まずフォーカスします。最初の段階で基礎の基礎に丁寧に取り組めば、その後の学習でつまづきにくくなるのです。



1年2組のみんなと



肥沼先生の授業は、とにかくスピード感に溢れていて、集中力が途切れることがありません。このスピード感は、先生と生徒との息が合って生まれるものです。それには、双方の信頼関係が不可欠です。教員を続けながら大学院に通い、修士論文で研究したテーマが「名人の授業を科学する」。上手な授業で評判の先生は全国にいます。その人たちの授業を分析したところ、教えるテクニック以前に、生徒たちとの良い関係を築くことに腐心していることがわかりました。早速、自分も同じようにやってみると、確かに授業の雰囲気が変わりました。できるだけ早く生徒全員の顔と名前を覚え、生徒に何を達成してほしいか、そのためにどんなふうに授業に臨んでほしいか、そういう思いを、他の教員も一緒に、学年全体に伝えます。顔と名前を一致させるのがだんだん難しくなってきたと苦笑しながらも、生徒の心を掴む努力は惜しみません。

授業中は余計な話をするのはほとんどありませんが、帰りの会では日常で遭遇した小さな出来事などを紹介し、生徒と語り合います。それを通して、お互いに、授業中とは別の側面を発見することができます。これも生徒との人間関係を築く大事な時間です。こういった何気ないやり取りや生徒たちの反応を書きためたものを冊子にして、先生たちに配っています。

授業はテンポよく進みますが、盛りだ

くさんな学習内容というよりは、一つのことを少しずつ形を変えながら繰り返し行い、退屈せずに確実に身につけられるような構成です。読む・書くは自宅でもできますから、授業では聞く・話す活動が中心です。生徒との対話や一人一人の発音に十分な時間を取るために、空白の時間を作らないよう、指導案を事前にしっかり頭に叩き込みます。そしてどんな時でも、プロの証としてキリリとネクタイを締め、生徒の前に立ちます。

肥沼先生は校内でもうひとつの重大な役割を担っています。それは学校行事のビデオ撮影です。趣味の映画鑑賞が高じて、自分でも撮影するようになり、今では運動会や文化祭などの映像記録をすべて任されています。生徒のことをよく知っているからこそ撮れる一瞬が満載です。膨大な撮影データを編集し、テロップを入れて、ドキュメント映画さながらに仕上げます。それらは学年ごとに数枚のディスクにまとめ、制作秘話などを記したプロダクションノートとともにパッケージにして卒業の際に生徒に配ります。生徒にとっては最高の記念でしょう。撮影技術の研究にも余念がありません。

中学校の先生になろうと決めたのは、中学3年生の頃。熱心に生徒と向き合う先生と出会ったことと、生徒会長として人前で話すことに快感を覚えたのが、そのきっかけ

でした。けれども英語は大の苦手科目。ところが大学に入ってから英語を学んでみると、それまでわからなかったことが理解できるようになりました。その体験が、肥沼先生を英語教師の道へと導いたのでした。学生時代に1年間、アメリカに国費留学し、英語を話すことに対する抵抗感も消えました。英語はあらゆる分野に関連する科目。その先にもっともっと大きな世界が広がっていることも、英語を教える魅力です。なりたかった中学校の先生になり、生徒の成長を見守る日々は、何にも代え難い幸せです。



小山 浩 副校長と

肥沼先生が、本校に赴任した歓迎会でのこと。自己紹介をするときに、ある”人”を連れてきました。それは、かれの無二の”親友”、けんちゃん。彼を膝の上に乗せ、話し始めました。なんと”彼”は腹話術の相方でした。これを使いながら、生徒が興味を持って授業に臨めるようにするとのこと。一同吃驚です。しかし、肥沼先生の授業に対する姿勢の一端を見た思いがします。それからの彼の英語科教育における活躍は目覚ましいものでした。本校の英語科全ての教員がそうであるように、日本一の英語教員、といっても過言ではない教師になってくれています。全国から英語教育研修会の講師依頼は引きも切らず、それでも決して本業の授業を疎かにすることなく、全力投球です。

このように様々な活躍をしながら、綺羅星の如くの附属中学校教師集団にあって、もうベテランの域に達しています。本校の中核となる存在として、益々その輝きを増しています。ご自身が、本校を教員として卒業するまで、輝き続けられることを、副校長としても期待しています。